といふ事でした。もとより忠義心にあつき兄弟は此の書によつていかに勵まされた事でありませう。親のために君にそむき孝の爲めに忠を忘るること無き樣その子の去就を誤らしめなかつたのは實に賢母たるの資格が備はつて居る者といはれませう。尙此の外にも細川忠興の妻の如き貞烈な行爲をなした者が少なくないのであります私は是等の人の事を聞く毎に立派な事でありますとは思ひましたが今までは只昔そういふ人があつた美くしい事だ位に普通の御話として聞いて居りました。然るに今度の乃木大將夫人の事がありいろ〳〵の感を持ちましたが從容として死につくとの事がいかにもむづかしい事であるとの事を考へましてからは是等の婦人の行爲が實に〳〵立派なものであるとの感が切になつて參つたのであります。實に貞烈といふ德は日本の女德として立派であるばかりではなく世界の女德として望ましきものでかゝる性格は世界の女子の模範とすべき女性でありませう。それがこの總ての方面に於て暗黑時代をなすと言はれて居る戰國時代或る社會の女子の間に顯著として見る事の出來るは世界に對して日本女子の誇とするに足る事と思ひます。（完）

◉朝鮮の話

文科一部二年　安永みち

私は大きなお屋敷を御門の外から覗きましたやうに朝鮮の山朝鮮の人朝鮮の街を見て參りました、で山と申しますのは築山の片端で人といへば玄關番か下男位のものでおざいます。昨年の暮には上野で拓殖博覽會が開かれましたので新領土についてお持ちになつた豐富な知識は更に鮮かになつて居ります、この時に私風情の者の申し上げることは全く蛇足でございます。

で私は歷史とか地理とかいふ立場からでなくほんの見たもの聞いたものについて紙屑屋が道傍の紙を拾ひますやうにお話いたします。從つて順序もなく、碌なものでございません。

私が馴染となりました土地は釜山でおざいます。多くの渡鮮者が釜山の埠頭で第一に驚きますやうに異樣の人間に疲れ切つた私の心は波立ちました。それはチゲといふ荷物運びでおぎいます。

釜山は朝鮮の玄關であり棧橋は釜山の玄關でございます、玄關には身分相應もしくは以上の品物を置きますやうにこゝにも目星しい建物は大抵集つて居ります。

この棧橋には下關或は門司から來ました二千噸位の船が二つ横づけにされてることもあり一つ殘されてることもムいます、こゝから釜山のステーション迄約一丁位離れて居りますこの間にある小さなステーションは南滿州鐵道の特別な停車場で長春行の一等急行列車が毎週三四回つゝ割合に上等のお客樣をのせて北へ北へと走ります。

ステーションは赤い煉瓦造で樓上はすつかりホテルになつてをりまして十五六圓位からだん〳〵にムいすまとか、皆樣のお宿に乏しくございません。

銀行稅關郵便局等は可なりのものでこの玄關の裝飾となつて居ります。

御承知の如く當地は朝鮮の正門であり通用門でムいますので出入も中々頻繁でムいます、朝と夕方と二回づゝ連絡船が出入いたしますので少く計算して一回百五十人と致しましても一日に六百人十日で六千人一月では一万八千人となります、山陽線九州線と京釜線との連絡の船でございますので直ちに南大門(京城)行の汽車に乘る人が多いといたしましてもこれ丈の人の木戸錢は可なりなものでございませう。

釜山の町としての大動脈は海岸に沿つて走て居ります。海から吹き通しの風のある邊は大抵第一流の町になつて居ります、それより以下の町は海岸迫つて起伏してる山の間に出來て居ります、朝鮮人の勞働者などは大方この山の間または山の上に住んで居ります。

この丘のやうな山は御承知の如く木のない若しくは木の少ない山でございます、山に木かなくてはゼロだと思はるゝのでございますがまた捨てられないなつかしさも湧くものでございます、土地の人が峨眉山といふのがございます、この山は外の山のやうに若い短い苗木を植ゑて不自然に山を四角に區切つてありません、綠のベルベットをしきつめたやうに軟かい青草が山の全面を蓋うて居ります、その色は眞夏でも初夏頃のやはらかな綠でございまして空を移る雲のかげがごくあざやかにうごいで、感じの强い處女のやうな表情を感じさせます、雨が降りますと白い絲のやう細い道が

いく筋かうき出します、これは山の向に住んでをる人達が作つた路を濁つた水が走るのでございませう。

私は暇さへあれば窓をあけてこの山にしたしみました、北の國の友達は手紙の端に

西の國木のなき山に沈み入る月の姿を君や見るらん

といふ歌を書いてくれました。八月の末のよく晴れた日でした、いつになくこの山がなつかしくて机をもち出して弟の繪具をかりて惡いことでもするやうに何年月日に日記の端にこの山の形と色をうつしました、そしてその下にかうかきました。

夕々木のなき山を見ることも最早幾日もあらすなりにき

北國の友が想像した木のなき山と私の別れたくない木のなき山とは余程相違がございませう。

是等の山には家がございます。そして家には住む人があるので夜になると灯をつけます。ことに朝鮮人は電氣や瓦斯は勿論私どもの使ふやうな强い光のランプをり持ちませんからカンテラの灯に似た赤い弱い灯をとぼしますので一層ぼんやりとして奥行のある夜景をつくります。

このランプをもたぬ人々は連絡船でくり込まれた瓦斯や電氣を使ふ人々に押しのけられてこんなに山にのぼつたのではございませうが、不便な山に住んで夜毎に美しい灯をつけてくれる人々の好意を無にせぬ樣、夕暮にはことにこの灯と親しみました。

内地人の家で水色や白や美しい模様のある蚊帳がつらるゝ頃になりますと松茸の開きすぎたやうな平たいかやぶきの家では夕方から頻りに蚊遣をたきます。夕顔棚の下や、ふきこんだお椽先で、たく蚊遣のほそ〳〵とした烟とはちがひまして、薄紫の烟は夕暮れの色に先だつて村をつゝみます、その色はいひやうなくよろしいのでムります、

かうして追ひ出しても中々退却し降參せぬものと見えまして蚊帳のない彼等は寐られぬのでおざいませうか、また家がせまくてその暑さに堪へられぬのでムりませうか、彼等は家の外に寢ます。家によつては庭も土間もないので道路に寢て居ります。夜十時すぎである村を通りますと一間許りの道にころ〳〵お芋がころがつたやうに寢て居りまして一つの提灯で三人歩くのに非常に困つた位でムります、その有様は實に無雜作で薄べりのやうなものを藉いた丈でムります、荷車の上などには大きな男が二人も三人も寢てゐて阿呆らしいしまりない彼等の顏には生の苦しみもないもののやうに見えます。

これは夜に限らず、公園の木の下、並木の下酒屋の前、時と處のきらひなく暇さへあれば寢て居るのでございます。

家や着物の不潔なのはまだ我慢も出來ますが食物の穢いのには見て居られぬ位でムります。私の家の直ぐ前に溝のやうな川がムりますがそこには裏の家から流しの水でも風呂のおち水でも流れて

來ます、そこはこの裏の山に住んでゐる朝鮮人の使ひ水になり洗濯場になり湯殿になります、朝は昨夜よごれた食器から便器まで運んで洗つてゐるかと思ひますと夕方にはその夜の膳に上すべき素麵樣のものを洗つて居るのでムります、勞働から歸りかげのヨボどもが銅色をした頑丈な体を洗つて居ることもあり、トーレトーレと單調な音をさせて洗濯してゐる女もムります、その女は時には勝手へ遊びにきて魚のあらや古いお酒などを嬉しそうに貰つて歸ります。

雨降りの時にはきます木履は珍妙な格好をしたもので私共の先祖が作つて喜んだ獨木舟に俎の樣な脚をつけたとでも申しませう。

朝鮮人に長い煙管は梅に鶯程陳腐な連想を起させますが、大正になつても梅に鳴く鶯があるやうに彼等には命から二番目の財でムいませう。こんな風のもので隨分面白いものもおざいますが、こゝには私が最も珍らしく思つた二つのことにとゞめます。

それは洗濯と引越しとでムります。

彼等は大方白い着物をきて居りますので洗濯も一通りではムいまん。朝の食事がすみますと小さな桶に汚れたものを入れて一尺餘りの棒を持つて川岸にやつて參ります。格好の石の上に陣どつてその棒でトントン叩きながらいつの間にか白くなします。それが五人や十人でなく大きな川になりますと緣日のやうに集つて盛んにトーレトーレといふ眞晝の心持ちを音にしたらこんなものかと思

はるゝ合奏をやつて居りますが、近くに來てみますと井戸端會議の議事が沸騰してをりますしあらが見えますので遠くで見たり聽いたりする方が宜しうムいます。かうして洗ひました衣物は草原とか垣根とかに引つかけて乾します。奈良時代の人達がやはりこんな工合にして香具山の上にも干したのでムいませう。時の女帝は、其白いのをみそなはして初夏の來たことをうれしく御思ひなされましたでせうか。彼地では年中この白いのが見らるゝのでムいます、引越しの前置として「チゲ」について一寸申し上げます。彼等は物を運びますのに女は頭で男は腰でいたします、頭の上にのせるべき性質でないもの例へば古い草履とか箒とか塵取りとか乃至は肥料の甕とかまで頭にのせて手に提けることを致しません、赤ゝ坊だけは頭でなく女も腰に巾の廣い帶で結びつけて居ります、腰の力は非常に強いものと見えまして大きな材木でも結びつけて妙な腰付きをして運ぶのでムいます。松枝や杉の葉を賣つて歩きますのが丸で小さな山か林が歩いてるやうにみえます、この運び方には「チゲ」といふ最も格好の道具がムいます。「チゲ」は股のある二本の棒を組み合せて出來て居りましてその股の上に大小種々のものを細びきで縛り上げます。巧にのつかるのが不思議な位でムいます。かうしたものを背負ふので器の名はやがてこの荷運びの名になつて、チゲチゲと申します、さて引越しといふ時には家の道具の多少に從つてこのチゲを雇つてきてありたけのものを背負はせて新らしい家へ行列を作つておもむろに運ばせます。內地には一寸見られぬ芝居でございます。

このチゲは市內到るところに居りまして極便利にお安く用を足します。釜山の町から釜山鎭まで二里近くもムいますのに夏の日盛りを僅二十錢で行つたといふ話もきゝました。

この釜山鎭へ遊びに行つた時でした、卅前後の大きな朝鮮の女に逢ひました。顏をおさへて大聲をあげて大道を歩いて來ますので正しくき印だと思つて心配しながら屋根の下にかくれてまちました、女は近づきました。

アイゴー、アイゴー、と叫びつゞけました。

愈々恐ろしくなりました同伴した弟は小さい聲で話しました、先刻逢つた葬式の後を追うて行くので、あれは、嗚呼、悲しい悲しいといつてをる、大方、父母か夫かに別れた女がその柩の後から泣いて行くのでムいざまう。あゝ、そのき印的表情は人生の最も眞面目な時の表情でした、恐ろしく思はれた叫び聲は、いたましく傷いた心から絞り出された聲でした。對馬海峽を隔てた國と國とに生れた私と彼女とはこれ丈の間隔がムいました、私は今も彼女に一層の同情をきへよせ得なかつたことを悔いて居ります。

然しこれは彼女を知らぬ一人の私がなした過失であつて彼女自身私が何と思ひ何と悔いたかは恐らく知りもいたしますまい、けれども、長い間彼等と接近して比較的事情に通じた人と彼等との間に行はれてをるこれ以上の誤解若しくは誤解でない事實がおざいます。

或る町端れで内地人の小僧とチョンガー（未婚の男―未婚者は一段低いものとして蔑られる―）と口論をして居りました。何でも小僧の德利を轉したとか轉がさぬとかいふことでムいますが同年輩の二人はある限りの智慧と力を絞つて腕力の成敗をきめにかゝりました。

私は靜かにその成行きを見ました、何れも天晴れの働き、中に雌雄なく思はれました。

今朝鮮人が來たら、日本人がきたら、といふことがふつと頭に浮ぶと一層面白くなりました、折幸か不幸かそこに内地の小商人が通りかゝりました。

コラ、チョンガー

大喝一聲、眞劍の二勇はむざ〳〵引きわけられました、或は鐵拳の一つや二つその間に飛びましたらう。

憐れなチョンガーは無條件にこんな言葉を浴せられました。この裁判者は喧嘩の起りも問ひません、すた〳〵急ぎました。恐らく第三者の私よりも何も知りませんでしたらう。また二人の努力も一向認めませんでしたらう。

今の世にこんないまはしいことがムいませうか。

このチョンガー位、馬鹿らしことがムいませうか。

小僧は德利を拾うて嬉しさに馳け出しました。チョンガーは底光のする目に涙をためて私をさへ恐ろしい者のやうに見て居りました、四五十日彼地に居りましたがこんなことは可なり度々見ました、その度にチョンガーの目にあつた涙を考へ出しました、その涙が私に語る内容は可なりに多うおざいました。

若し朝鮮人の敎化といふことが大切な問題であるならはこの涙の問題も決して不急の察てはおざいますまい。（完）

感激は大事を生む。人生の大事と稱すべきもの其の類少しとせず。隨つて感激の情も亦其の類少からず。或は恩を受けて感激し、或は敎を聽きて感激し、或は知己に遇ひて感激し、或は事變に臨みて感激し、或は古人今人の言行と事蹟とによりて感激す。かくの如く其の類多しと雖、或偉大なる刺激により或偉大なる激動を心に感じ此の激動の餘波より不斷の努力と不磨の功業とを生み來るに至りては則ち一なり。嗚呼感激は天啓なり。

吾人平居無事にして、見る所聞く所いづれも眼前尺寸の事に過ぎず。かくの如き時に當りて誰か能く自己の心中に偉大なる靈力あることを信ぜんや、かくの如くにして瑣細の生活に覺め、瑣細の生活に眠り、半生を途り盡す間に、人皆漸く活きながらの機械と化し、而も之を自覺せざるなり。斯くて多くの人は餘りに自己を輕視し、餘りに自己を蔑如し、自己に偉大たり傑士たり神仙たり佛子たるべき本性の具有せることを覺らずして己むなり。感激なき一生は實に斯の如きものに外ならず。たゞ感激によりて吾人は或偉大なる靈力を認め、同時にまた自己胸中に偉大なる靈力の潛在せるふことを自覺す。五尺の小軀を有せる吾人が、天地の大と一致し得るは即ち感激の力による。感激はそれ天啓にあらずや。（こかげ）